

花陰に花の雫のかをりけり 秀一

桜蔭俳話会を守り育て俳句一途に生きて来られた重富北坡氏への追悼句である。闘病生活の一端を静かな詠嘆でとらえた北坡さんの秀句、「点滴を花の雫と思ひをり」を踏まえたものである。「花陰」という季語の選択が活きており、哀惜の情にあふれている。

連れ舞ふは飛天か真夜を散る桜 みどり

夜空に散り舞う桜の姿を「飛天」の二文字に凝縮した作者の感性の豊かさには、まさに感服するほかはない。花卉の白と闇の黒というモノクロの世界ではあるが、金粉を蒔いた壁障画から飛天が抜け出して眼前にいるかのように見える、優れて絵画的な秀句である。

春眠か情眠か蹴って人となる 幸枝

「春眠か情眠か」だけでは心地よいフレーインの句として終わるだけであるが、「蹴って」という動作を入れることによって秀句になった。人は覚醒末期に今日一日の計画が結像し、決然として起き上がる。前向きに生きようとする作者が見え、「人となる」の下五が効いている。

空白の日記めくるや桜蕊 ヤエ子

「時間の経過」をコネクターとした秀句である。日記を書かない日々が続く間に花は散り、責め立てるように桜蕊が我が頬を打つ、といった句意であろうか。厳密には「桜蕊」の季語は「桜蕊降る」として定着しているので、「日記空白さくらしべ降り」にけり」とすることもできる。

涅槃西風をちの江ノ島寝釈迦めく 貞勝

見慣れた風景を自己に意味あるものとして捉え直すのも俳句ならではの醍醐味。江ノ島とそれを片瀬の浜に繋ぐ大橋とを合わせて、寝釈迦の姿に見立てたものであろうか。大橋は、この世とかの世の架け橋のように感じられる。眼前の事象を心象化することに成功した一句である。

トンネルを抜ければふはり春の月 幸

「トンネルを抜ける」のフレーズは多用されているが、掲句では「ふはり」の存在によって一句が成立している。薄暗闇のトンネルの出口の先の空に月が風船玉のように浮かんでいるのである。「春の月」の季語の本意を形容する言葉として、「ふはり」の斡旋は絶妙である。

推敲のための参考

原句	春の暮聖なる牛の糞あちこち	ヤエ子
参考例	逝く春や聖なる牛の糞の影	または、糞に影
原句	長押よりも高き盆梅四百年	幸
参考例	長押より高き盆梅蔵屋敷	
原句	葉桜や長机一つ寺子屋跡	幸
参考例	寺子屋の跡の机や花は葉に	

会場・桜蔭会館 文責・増田 守